クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院：寺院調査から（3）

黒　田　景　子

10. シック（Sik）地域の寺院

地域の特徴：西側にBkt.Perakがあり，東の山岳はタイ国境と接する。南はバリン郡に接する。タイ国境近くのムダ川の源流地域は堰止のダムになっており，水源保全林である。東南部西南部もそれぞれ保全林のある山に接している。丘陵というより山間というイメージの土地である。2000年以降，北西部を接するパダントラップ郡に抜ける道路を大拡張し，同じくタイと国境を接するパダントラップ郡のドリアンブルン国境（Kota Putra）を再開する計画が進行中で（予定では2010年５月），大規模な開発工事が行われており，ほんの５年前とも景観は大幅に変わりつつある。一番目に付くのが道路の二倍拡張と交差点整備で，特に，クダー中央部を東西に横断する Gurun-Jeniang-Sik の拡張道路はこの地域の景観と交通網を全く変えてしまっている。

［写真66．Sikバスステーション］

［写真67．景観を変える道路拡張］

1）Wat Kalai

正 式 名 称：Wat Kalai

位 置 情 報：北緯５度50分24秒　東経100度36分92秒

標　　高：38m

立地と景観：ムダ川は源流をクダー北東部のタイ国境付近にもち，そこから内陸を蛇行しながら南下して，クダーの南部に河口クアラムダを開くが，このムダ川に接しているタイ仏教寺院が５つあり，何れも成立は古い。Wat Kalaiもその一つで，元は河川が主たる交通手段であった。現在はNamiからJeniangに至るムダ川の左岸に沿うように走るK153号線に面する。Bukit PerakとBukit Seleranの山間部の谷にあたり周囲はゴム林とバナナやランブータンなどの果樹園に囲まれている。ここでもパルミラヤシが数本みられ，境内にもある。

歴史と伝承：寺の歴史は150年程といわれているが，村は約200年の伝承をもつ。比較的資産のある者が果樹園やゴム園をつくったといわれ，この地域のシャム人は他の地地域よりも豊かであるといわれてきた。村の人口は1963年の記録では200家族で1,000人と言われる。

僧　　侶：僧侶は３名。1963年の記録では僧侶は７名でサミが２名。住職は地元のシャム人である。僧侶の中にバンコクで修行中のものもいる。

寺院内施設：目立つのは高さ約10mの巨大なコンクリート造りの座仏像である。幹線道路に接する寺の門が小さいが，奥に境内が広がっており，一番奥はムダ川（タイ語ではMenam Numと呼ばれる）に接していて階段はないが，砂地に川の水が渦巻いている。

本堂はその川に近く西に向いて立てられており，タイのシラパコン形式の二重屋根構造である。建築年は60年代。セーマーに囲まれている。背後に仏塔があり，その二つを囲む塀があり，西正面に夜叉（鬼）の立像が二対ある。同じ頃

の建築と思われる大鐘楼があり，鐘と太鼓二つが吊るされる。また寺には川沿いの村落へ通じる道に木造の裏門がありその隣に小鐘楼がある。

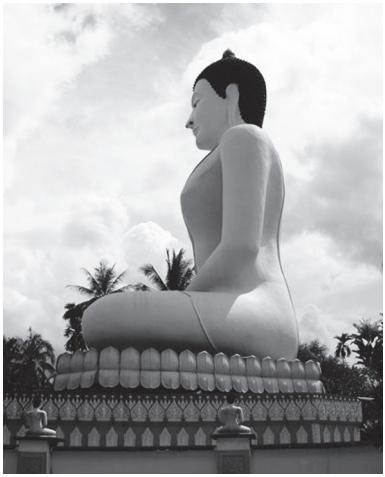
庫裏は平屋建ての民家風のものと木造のものが数軒あり仏教装飾の様式ではない。講堂と台所にあたる建物には仏教的な装飾がされている。

先代住職坐像が一体祀られている。

黄色い布を巻きつけた土塊のプートン（土地神とされる）があり，その前にコンクリート造りの仏像が置いてある。

巨大仏のとなりにはタイ語の学校があり，４年間の授業を行う。サッカー場となる広場はローイカトンなどの村の催事にもつかうため，奥には演舞台がある。

［写真68．本堂］



［写真69．高さ10mの巨大仏］

［写真70．寺院に接するムダ川］

２）Wat Cherok Pdg

正 式 名 称：Wat　Trok Padang

位 置 情 報：北緯５度48分30秒　東経100度43分24秒

標　　高：54m

立地と景観：シックの街から２キロ程のところにある。この寺もムダ川の支流沿いにたてられている。2000年からクダー州は大規模な州内幹線道路の改修拡張工事を行っており高速道のICのあるGurunとSikを結ぶ道路K10を大拡張して中央分離帯のある片道二車線道路として高速道路とほぼおなじ規格に改修中である。そのため，SikとJeniangとGurunを結ぶ旧道路は原型を留めないまでに道筋が修正され，その結果，この道路沿いの寺は，道路改修の恩恵を受けて参拝者が大幅に増えた寺と，その恩恵を受けられない寺とにはっきりと目に見える違いが生じた。Wat Cherok Padangは前者であり，この近年の参拝者増加による変化が著しい例である。寺は直接高速道路化したK10号線には面していない。景観はBukit Selaranの南の麓で川沿いの谷間の低地である。新道路は寺と丘陵の間に土を盛り上げて作られたものである。路傍に多くの寺がそうであるように入り口を示す看板が立てられて，民家の並ぶ細い村の道を通り抜けて門に至

る。なおこの看板は華人参拝者の多さを示すようにマレー語の他華語で記されている。

歴史と伝承：寺は伝承では120年程前に立てられたと言われる。強制移住を経験せず移動しなかったため村が荒れる経験をしていない。しかしながら，この村はそれほど大きなものではなく，1963年の記録では村の規模は50家族で250人としている。

僧　　侶：1963年の記録での僧侶は２名サミが２名。住職は地元のシャム人である。

寺院内施設：1963年当時は木製の本堂と庫裏が二つ台所と礼拝堂のみが記録されている。2009年には，建物はコンクリート製のものにほぼかわっており，ここ数年で立て替えられたらしいものも多くある。探訪者の多い寺であることが随時みてとれる。本堂は1970年代にたてられておりセーマーに囲まれている。庫裏は平屋建てでそれより新しく，短期出家者のための古い木造の庫裏もある。寺務所があり，そこには英語，マレー語，華語で「休息中は邪魔をしないでください」と看板がある。このような記述のある寺院はここだけである。門はタイでよく見られる様式でたてられていて，もっとも新しい施設は，学校と講堂をかねている建築である。そのほか敷地の奥に寄付された建物があるが，特徴的なのはこの建物と隣の仏塔のすべてが緑のビール瓶をレンガかわりにつかってたてられていることである。このようなビール瓶を使った建築はタイにも存在するが，クダーではこことBalingのWat Tasのみである。また僧侶によるまじないの小屋があり，その寄付装飾から華人の来訪が多いことがしれる。そのほかサーラーには阿弥陀仏の功徳を説く張り紙とともに，日本への留学を誘う「三笠野語学センター」（表現ママ）[1]の垂れ幕があり，建物の一つは瞑想室と

1　三笠野語学センターとは，横浜のロータリークラブの米山記念奨学生として日本と関係をもつペナンの華人鄧奇偉氏が2006年に設立した日本留学準備コースを有する語学学校である。

して使われている。もう一つのサーラーには来訪者のための寄付箱，蓮型ろうそく５リンギット，線香３リンギットの無人販売所が備えられている。

寄付物としては先のビール瓶建築物と共にコンクリート製の十二支像，人工洞窟と中のルシ像がある。

［写真71．本堂］

［写真72．僧侶オフィス］

［写真73．ビール瓶で作られた仏塔と講堂］

3）Wat Begia

正 式 名 称：Wat　Thai Charern

位 置 情 報：北緯５度48分59秒　東経100度38分92秒

標　　高：46m

http://www.rotary-yoneyama.or.jp/report/img/yoneyamadayori_1003.pdf

立地と景観：K10号線沿いにある。ただし，JeniangとSikを結ぶ高速道の建設によりK10線自身が分断されているため，2007年に訪問したときからわずか二年で所在がわかりにくくなるほどまで周囲の景観が変化している。敷地の東側にムダ川があり，橋が架かり，Jeniangの街と接する。

歴史と伝承：約150年くらい前の移住といわれている。Begiaに関しては，マレーシアの大学生による論文があって，この地域のシャム人の移住とその経緯について記した興味深いものがある。その報告によれば，この村のシャム人は1821年頃に南タイからクダーに南下してきたが，Tanah MerahやPdg.Pusingには既にマレー人がいて，土地が無かったため，さらに南下してKalaiから奥地のこの地域にとどまった。当地にはマレー人村落もすでにあり，農地というよりは地方商業地であったが，そこに落ち着いた。40家であったという。村の名前はもとBiakであったがマレー人との共生を示すため1910年にBahagiaとつけられ，それがBegiaに訛ったという［Abu Hassan bin Dahaman, 1976. "Petempatan orang-orang Siam di Kampung Begia Kedah Satu Tinjauan,Jabatan Sejarah Univerisiti Malaya ,KL］。1963年の記録では，220世帯.1500人ほどが住んでおり，村民はKalaiやアロースターのNicrotham寺院建設に多額の寄付をしていて裕福にみえたという。寺院は1925年に建てられた。

僧　　侶：1963年には僧侶は８名，サミは83名であったが，2009現在は住職はいない。僧侶は短期出家者のいるときのみ在住であるため，登録もSamnakのままである。

寺院内施設：本堂はタイ式。説教堂は二重屋根式。庫裡と小寺と住職の庫裡は多層屋根の建物である。台所あり。門は1991年にた

てられたものでタイ式の装飾はあるが木造である。2007年当時，四面をもつ小講堂を建築中で，その様式は東北タイ様式とみえる。サーラーにはさまざまな催しもの案内が華語とマレー語，タイ語でかかれている。歴代住職像。特に寄付像はなし。近隣のWat Cherok Pdgに比して入り口が分かりにくいせいか，来訪者も少なくさびれた印象を受ける。

［写真74．木造門］

［写真75．建築中礼拝堂］

［写真76．寺の前のマレー人商店］

4）Wat Kura

正 式 名 称：Wat　Thamsiriwararam

位 置 情 報：北緯５度56分60秒　東経100度40分00秒

標　　高：51m

立地と景観：K153号線沿いにあり，ムダ川から１キロほどのその支流に沿っている。調査時は水無川であったが，川への階段はあった。Bukit Perakの東側のムダ河沿いのシャム人村落の中心的位置にある。川沿いを除くと，回りはゴム林に囲まれている。パルミラヤシの姿あり。寺はKoraとかKuraとか呼ばれたが，Kuraはマレー語で陸亀の意味であり，現在の寺院は亀をシンボルとしてさまざまなところに亀の立像が造形されている。

歴史と伝承：2005年に作られた門の脇にマレー語とタイ語で寺院の由来が説明されている。それによれば，伝承では建立は300–400年を越える。120家のシャム人の村があったという。1963年の調査記録によれば，1950年代に強制移住を経験し，村人はJeniangに移された。その間に村は軍隊によって荒らされてしまい，数年後に帰還して村と寺を建て直したという。1963年時には畑と水田を営む村人は80家族，400人であった。寺院の正式名称は1962年につけられたらしい。

僧　　侶：僧侶が４名でサミが１名〔1963年記録〕住職はKura生まれのシャム人である。

寺院内施設：1963年の調査時の記録写真にも登場した，古い本堂が廃屋ではあるが保存されている。高床式で屋根が三つになった特徴的な寺院である。屋根に漆喰で仏像の飾りがある。

僧侶の庫裡も同じ形式で高床式を基礎として二階部分が居住空間である。

近年のタイの様式で建設された美麗な本堂を建築中であるがその玄関前にも大亀の像がある。

木造の説教堂，台所と食堂，講堂はタイ語学校にも使っている。菩提樹を囲んだタイルとトタン張りの仏像安置所が

ある。創始住職像の小屋。

寄進された建物としては富貴を約束する二人の女性像，漢語の説明付き。

新築中本堂前の亀像付きの池。仏塔式のプートンの小屋。小仏塔。鐘楼ではなく近年できたスピーカーが数個ついた塔がある。

将来的に二階建てのタイ語学校を作る計画があり，寄付を募っている。英語とマレー語，タイ語の説明あり。

お守りや呪いで有名なカンボジアの僧侶が尋ねてくるなどのイベントがあるようで，漢語，英語で宣伝の垂れ幕がかかっている。

亀のシンボルが溢れており，寺を囲っているコンクリートの塀の上にも数メートルごとに亀の立像，ひょうきんな表情をしたものも含む，が並べられており，「亀寺」として有名である。なお，クダーの十二支，特にムスリムの十二支ではブタの代わりにクラ〔陸亀〕が置き換えられていることもあり，クダーにとって亀は親しみやすい動物でもある。

［写真77．タイ様式の本堂］

［写真78．昔の木造本堂］

［写真79.　シンボルの亀がいたるところにある］

5）Wat SG Siput

正 式 名 称：Wat Sungai Siput（Wat Klong Hoi）

位 置 情 報：北緯６度０分62秒　東経100度40分86秒

標　　高：102m

立地と景観：K153号沿いはほとんどがゴム林だがクラ寺から北にさかのぼる途中でBukit Perakに登るかなり急な細い坂道があり，それを約２キロほど登る。坂道の途中にある新しい小さな寺で，道の反対側の標高差ある低い位置に村が見え隠れする。

歴史と伝承：60年ほど前に建立。

僧　　侶：僧侶１名。

寺院内施設：小さな本堂があり，本堂内の脇にセーマーが置かれている。正式な本堂の建設計画があり，すべて華語で寄付の要請文が書かれている。

庫裡にあたる平屋の建物と，華人家族の寄付による四面像のトタン屋根作りの小屋のみ。

門には寺院の開いている時間帯９時から19時までが記されているが，それは，2007年にここに来ていたタイ，ソンクラーからの客によれば，この寺院の僧侶は入れ墨が上手く，

評判が高いので，シンガポールからもインド系，華人系の来訪者があるからであるという。寄付者の名前のリストがあったが，ほぼ全員が華人名である。

［写真80．タイナンバーの車が来ている］

［写真81．本堂内部］

6）Wat Sungai kap

正式名称：Wat Khlong Kap （Wat Buddha Rachanorn）

位置情報：北緯６度３分11秒　東経100度44分70秒

標　　高：63m

立地と景観：K153号道路がk8号道路に合流する三叉路からNamiへ750m。k8号道路は，Kuala NerangからNakaを通ってKg.Pinangに至る1939年にはすでに存在していた幹線道路であるが，Sikの奥地であり山の続く山地のただなかである。ムダ川は1.2km先にあり，寺は接地しない。さらにFeldaの開拓村があるので1960年代の開発地域と接すると推察できる。近隣はゴム林が多く，村の畠程度。

歴史と伝承：2007-2009の間に三回訪問しているが，僧侶や住人が不在で聞き取り調査できず。1963年の記録にもこの寺院は見当たらず。

僧　　侶：調査不足である。正式な Wat ではなく Samnakngan なの

で住職不在の扱いらしい。雨安居時に僧侶３名の姿と世話をする家族を見かけた。

寺院内施設：寺の敷地は広い。建物は多くはコンクリート製で新しいが様式は門以外はタイ様式ではなくクダーの一般民家の作りである。タイ式を思わせるのはタイル製の門のみ。民家風のコンクリート製本堂（タイル貼りのセーマー有り）

南タイにも見られる特徴的な飾りあじろ編みの壁をもつ木造庫裡。台所，説教堂，鐘楼。初代住職像が納められている小屋はインドネシア・メダンからの寄付によるらしいコンクリート作り。境内はよく管理されている。

寄付像は釈迦幼児立像，華人の寄付による観音像２体。四面仏像。

［写真82．木造の庫裡］

［写真83．本堂とタイル張りのセーマー］

7） Wat Kubang Kesom

正 式 名 称：Wat Chanhom

位 置 情 報：北緯６度０分１秒　東経100度44分60秒

標　　高：63m

立地と景観：K8号道路がムダ川を渡るとムダ川東部に南に下る道路がある。K153号道路とこの道路はムダ川の作る渓谷の東西を南下してほぼ並行に走る。いずれも山地でゴム林に覆われて

いる。このWat Kubang Kesemは153号道路が大きな開拓村Felda Lubok Merbauに入りこんだまま東進して三叉路にぶつかったところにある角の敷地にある。二つの道に面した門をもち，大きな寺である。

歴史と伝承：1934年に建設されている。1963年の記録では　村は80家で300人規模。

僧　　侶：僧侶は３名でソンクラーからきているタイ人である。

寺院内施設：本堂，経堂，庫裡の他，学校や体育館があり，いずれもコンクリート造りでごく近年に建立されたものである。講堂は2005年に完成したばかりである。屋根の様式はタイ風ではあるが，きらきらしい飾りはなし。Wat Congのものとデザインがほぼ同一である。タイ語学校がある。

寄付像は釈迦の一生を描いたコンクリート製のパノラマ式立像群。

［写真84．庫裡］

［写真85．釈迦の一生パノラマ像］

8）Wat Simpang Tiga

正 式 名 称：Wat Simpang 3（Batu Sekutul）　別名（Wat Tutui）

位 置 情 報：北緯５度58分64秒　東経100度48分24秒

標　　高：111m

立地と景観：2005年に完成したBerisダムのダム湖のわき斜面にある。このダム建設で水没した地域にシャム人村落があったと思われる。ダム湖はムダ川水系のブリス川の上流をせき止めることによって生じ，流域の集落は移住を余儀なくされた。入り口に「Wat Simgpang 3, kg. Batu Seketul　三叉路暹越」と記された看板のみ立つ。

歴史と伝承：水没以前のムダ川上流地図ではよりさかのぼった地域にkg.Siamという名前がみえる。1939年の地図である。そこに寺があったかどうかはさだかではなく，1963年の記録にもこの地域のシャム人村落の記録はない。付近の開発の様子からシャム人村落の所在もよく分からなかった。

僧　　侶：１名。

寺院内施設：トタン張り屋根の庫裡，　講堂，仏像の祠，聖木の根本の仏像とその覆いのみである。門も本堂はない。

［写真86．寺の全景］

［写真87．看板］

9）Wat Kg Cong

正 式 名 称：Wat Chong Charern Suddhaward

位 置 情 報：北緯５度52分98秒　東経100度45分16秒

標　　高：73m

立地と景観：ムダ川の支流であるシック川の南北に延びる渓谷。kg.Teremendam Melayuとkg.Teremendam Siamという二つの村がK８号道路とK153号道路を結ぶ山越えのショートカット道路と三叉路を造るあたりにある。山地渓谷で果樹と水田が目につく。

歴史と伝承：村の存在は伝承では500年という。村人はほとんどシャム人でマレー人も少しおりタイ語を使っている。強制移住を経験しており，そのとき村人は　Padang Lembuに集められた。６年後帰還をゆるされるようになっても，元が貧しい村であるので戻らなかった者があり，1963年の記録では80家族400人ほどであった。寺そのものは120年ほど前に出来たという。

僧　　侶：1963年の時には僧侶３名であったが，2008年段階では６名いる。毎年ではないがここで出家するものがいる。

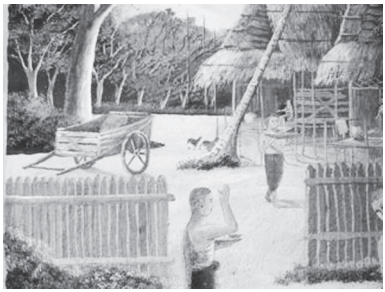
寺院内施設：1963年の段階では庫裡が２-３棟あるだけであったが，2008年段階では，コンクリート作りの本堂（2005年完成），説教堂（建築中），トタン屋根造りの台所と庫裡。本堂にはセーマーは無く，敷地を囲んだ塀があるが，タイ様式というよりはタイ様式に似せた形である。Kubang Kesemのものと似ている。本堂の建築資金は華人の寄付が主であり，アロースター，ペナン，ジョホールの華人であるという。

庫裡の正面に来歴がかいてあり，1985年の建築である。この庫裡には村人による村の様子を描いた壁画がある。

この寺には寺の世話をする村役が居て，特にタイの暦の上弦月15組，下弦月15組で食事当番を明記した看板がある。２つから３つの家族で托鉢をしない僧侶の代わりに食事を作りに来ている。村人による寺の維持コミュニティがしっ

かりあることは1963年の記録にもでており現在も機能していると見られる。ロイカトーンの祭は行っている。
寄付像としてはコンクリート造りの髪を洗う女性像。装飾に華人色は見られない。
インタヴューした僧侶41才は22才のときに出家し，水晶を体内に感じる瞑想法を教えている。英語もまた流暢で尋ねてくる華人にも瞑想法を教えている。

［写真88．庫裡と食事当番表］



［写真89．庫裡内部の壁画］

10）Wat Kuala Beris

正 式 名 称：Wat Kuala Beris
位 置 情 報：北緯５度58分23秒　東経100度43分18秒
標　　高：81m
立地と景観：ムダ川の支流ブリス川の分岐点に近い位置にあるたいへん小さな寺である。バナナ園の中にあり，看板がないとほとんど見過ごす。村の名はkg.Palee。
歴史と伝承：寺院ができて30年であるという。
僧　　侶：２名
寺院内施設：バナナ園の中に庫裡があるだけでその他の設備はない。来るのはシャム人だけであるという。2007年。

［写真90．バナナ園の中の寺全景］

［写真91．門はない］

11. パダントラップ（Padang Terap）地域の寺院

地域の特徴：クダー州北東部の山地。タイのソンクラー県と接する。クダー川の上流に当たり，流域の渓谷沿いに村落がみられるが，周囲は標高200～600mの山岳である。パダントラップの中心に当たるクアラヌランからクダー川沿いにさかのぼる道路は，17世紀のオランダ資料にも登場するマレー半島東側につうじる横断路の一つであった。具体的にはパタニとの通商路である。タイとの国境にはKg.Durian Brungという村があり，1930年代から国境地域の山間部にはサトウキビが植えられた。1950年代に国境の治安とマラヤ共産党の封じ込めのためにドリアンブルンのタイ国境は閉鎖され，住民は，内地に強制移住させられた。国境近くに国境警備隊の屯所が設けられてきたが，1990年にマラヤ共産党が武装闘争を放棄して投降すると，にわかにこの地域の開発への動きがでてきた。クダー政府の2010年までの開発計画で，ドリアンブルンの国境を新たに整備して開放する大型プロジェクトが動き，2009年４月にはマレーシア側の国境施設，コタ・プトラが完成した。タイ側の施設はタイ深南部の治安問題からまだ完成していない。2009年９月現在。国境閉鎖から数十年が立っているため，K11号線のWat Saibontoから以北には村落は現存していないが，パルミラヤシの点在がかつてのシャム人の集落の跡をしめしている。

［写真92．旧ドリアンブルン村の廃墟］

［写真93．新国境Kota Putra 2009］

1）Wat Naka

正 式 名 称：Wat Thepchumnum

位 置 情 報：北緯６度８分03秒　東経100度39分46秒

標　　高：77m

立地と景観：アロースターから東に伸びるJalan LangarことK8号道路上にある。地名もタイ語起源であるが1950年代の国境地域からの強制移住時代に多くのシャム人やサムサムマレー人がこの地域に移住させられている。K8号道路が開通したのは1950年代のことで，それ以前Nakaを結ぶ道路はパダントラップ郡のKuala Nerangとつながっていた。Pendangの内陸地域の道路はほとんどが1950年代以降に整備されたもので，この寺ももともとはクダー川の支流パダントラップ川の南からの水路沿いにある。

歴史と伝承：Nakaは強制移住移住の時代にシャム人マレー人ともにその移住先となっている。５年の移住期間が終わり大半のものが元村へ戻ったのは，ここが山岳地で，耕作を行う余地がなかったためだといわれている。1963年の記録では400世帯が居住していた。1963年にはタイ国王の行幸もあったらしい。

僧　　侶：僧侶は８名ですべて地元のシャム人である。1963年には僧侶は11名でサミが６名であった。

寺院内施設：敷地は大変に広い。本堂はコンクリート造りの平屋で得に仏教的な装飾はなし。セーマーあり。

境内の建物がほぼすべて同じ時期に立てられたものらしいコンクリート作りで装飾もなく簡素である。庫裏，礼拝堂，サーラーとコンクリートの演舞場らしきもの，仏塔，台所と説教堂

学校は二階だてで，別に図書館がある。この学校はマレーシア政府が建てたもので，マレー語の授業も行われている。タイ語教員もクダー州政府が雇っているものである。

ローイカトンの行事も行われる。地域のコミュニティの中心の場所として使用されている。村で寺の運営委員会のようなものがあり年中行事などを行う。寄付像はコンクリート製のルシ像のみである。

［写真94．礼拝堂］

［写真95．学校］

２）Wat Pedu（Wat Tangjong）

正式名称：　Wat Phikultharam

位置情報：　北緯６度13分54秒　東経100度41分96秒

標　　高：38m

立地と景観：クアラヌランから分岐するクダー川の支流Pedu川に沿った渓谷にある。K13号道路に面する。周囲は村落で水田と果樹園である。

歴史と伝承：伝承では日本軍侵入の少し前の建立という。1939年の地図には記載はない。この寺はここから村の細道で約２km北にあるTanah Merahから，人が移住させられた時にできたと考える方が妥当である。Tanah Merahの寺とシャム人のコミュニティがほぼ重なる。

1963年の記録ではTanah merahと区別をしていないらしい記述となっている。それによると1950年代の強制移住期間はNakaに行っており，村人は定住を断って戻ってきたとする。タイ語名でBaan Praduと呼ぶ村で，そこから呼び名がPeduとなった。村の名前はKg.Tanjungとも呼ぶ。

僧　　侶：８名。半数は若く，一時出家らしい。女性の出家者も一名いる。白いブラウスとスカートであった。

寺院内施設：本堂は2000年にコンクリート作りのものが作られ，古い本堂は廃墟のままとなっている。本堂内にはシャム人や華人の寄付による釈迦の一生をあらわした壁画が多数飾られている。寺の世話はシャム人のみであるというが，華語の説明などが手書きで書かれていて華人の訪問，さらにクダー州のマレー人官僚の表敬訪問などの記録がある。

コンクリート造りの庫裡とトタン屋根の食堂の他は，近年のタイ様式でつくられた小サーラー，門，住職の墓が数基，本堂内に創始住職像。鐘楼。

寄付像としては，ルシ像（会社の寄付），観音像と招福女性像。四面像。誕生曜日の７仏像。建築中の祠とそれに納める予定の仏像２体。

僧侶の食事は村人が運んでくる。その後は寺内のサーラーで家族で食事をしているところをみかけた。

地域のシャム人はタイ語方言以外話せないものもおり，シャム人コミュニティとして孤立的な環境でもある。寺院は敷地が大きいため，ソンクラーン，ロイカトーンなどのシャムの祭も行われる。

［写真96．講堂］

［写真97．鐘楼］

［写真98．僧侶と尼僧］

［写真99．タンブンにくる人々］

3）Wat Tana Merah

正 式 名 称：Wat　Tana Merah

そ位置情報：北緯６度15分77秒　東経100度41分32秒

標　　高：47m

立地と景観：ムダ川と支流Pedu川の間のなだらかな傾斜地に広い水田地域がある。幹線道路がなく，水田の間の車一台がかろうじて通れるあぜ道がくねくねと続いており，水田地域の真ん中にシャム人村落がある。寺の前に大きな木があって目印となっている。

歴史と伝承：1939年の地図にはすでに記載されており，寺は小さいが村は100年以上立っていると思われるが，村人の伝承は曖昧である。タイ語の方言のみの話者が多く，マレー語は子どもの通訳を介していた。

僧　　侶：住職は１名であるがバンコクから来たタイ人。2009年には一時出家者が４名

寺院内施設：現代タイ式の門（2001年建立）と1970年代ころのコンクリートの経堂。クダー民家方式の平屋の庫裡，本堂があるがセーマーはない。仮本堂扱い。創始住職像，鐘楼，タクローコートがある。

2008年の調査時には住職が不在だったが，2009年に行くと，丁度近所の村kg Peduからも一時出家中の僧侶の家族など多くが尋ねてきてタンブンの最中であった。

30代の住職（バンコクのタイ人）が読経の主となり，一時出家者が４名講堂の一段高いところに座る。住民はその前に並び，経に手をあわせるが，住職の経にあわせ，住職のところから一本の気の流れをつくるように隣の人の体に触れて体を傾ける。

講堂内には，住職が手作りで，７曜日毎のカラフルな７色のラッキーカラーにわけた寄付盆の段がつくられ，ラッキーカラー色のバケツなどが並んでいた。また，講堂の一角ではラッキーカラーのクリスタルの販売もしていた。イ

ンターネット用のパソコンなどもあり，若い僧侶が意欲的な活動をしている様がみてとれた。講堂内部がこのように整えられたのは2004年からであるらしい。ポスターに華語がみられるが，華人の訪れはほとんどないと思われる。

全体としてシャム人だけの孤立集落の印象が強く，バイクで通行可能なあぜ道を通って，南のWat Peduと繋がる抜け道がある。

［写真100．水田の中の小道を行くバイク］

［写真101．礼拝堂］

［写真102．僧侶の読経中体をふれあう村人］

［写真103．誕生色の寄付鉢］

4）Wat Baru Padang Senai

正 式 名 称：Wat Saibonto

位 置 情 報：北緯６度21分55秒　東経100度41分57秒

標　　高：44m

立地と景観：アロースターからクアラヌランをとおってタイ国境のドリアンブルンへ至る道の人家のある限界に存在する。寺は川沿いにあるが，この寺から先に人家はない。広大なサトウキビ畑と山地の国境まで続く管理された道だけである。

歴史と伝承：この地域は1930年代からサトウキビを植える開発地域となったが，道の歴史はもっと古く，15世紀には山越えをしてマレー半島東海岸に至る交易路であり，稲刈り農民の季節労働移動路でもあった。1950年代にマラヤ共産党の補給路を断つ目的で，国境から20キロのあたりまでの無人化がはかられ，村は移住させられた。ドリアンブルンのあたりの人々は皆この地域より移住を強いられた。ドリアンブルンは閉鎖された国境となった。しかし，2000年頃から国境開発が試みられ，道の拡張，タイとの国境税関の共同建設で2009年にはマレーシア側の道路と国境施設は完成した。寺の手前の集落はKg.Penkalan Taniあるいは　B.Pen pak Tani （パタニへの境村）というシャム人集落である。

僧　　侶：住職１名。

寺院内施設：最も大きな庫裡は1970-80年代にたてられたコンクリートである。本堂はスレート葺きの平屋のコンクリートで，周囲にセーマーが設置されているが，それ以外にタイ的な装飾はない。その他，短期出家僧のためのものと思われるトタン葺きコンクリートの小型の庫裡が４棟ある。門もコンクリート製で装飾はタイ的だが全体が白くぬられている。

礼拝堂も大きな庫裡と同じデザインで大きい。象の像が一

対。境内は広く，タクローコートがある。誕生仏８体を設置した建築物があり，装飾から90年代のものと推察される。大型の観音立像が寄付されており，その足下にはサギや観音の従者像があり彩色されている。また，ライトアップされる構造になっている。３度の訪問中二度華人の観光客を見かけた。

境内の庫裡の端に「(阿弥）陀隆)」としるされた阿弥陀堂がある。大乗仏教系の寄付である。

「龍善陀石」なる民間信仰のほこらがあり，僧侶像，四面仏，修行僧立像　ルシ像などの小型の寄付像が並ぶ。訪ねてくる信者のためにお守りの腕輪，プラクルアン，などがそれぞれ販売されていて１リンギット，５リンギット，10リンギットの値札が貼ってあるなど，意外に人の訪れがあることを示す。

2010年２月の訪問時には，新しい庫裡の建設が始まっており，訪問者に瓦代金の寄付をつのる設備があった。建設に従事しているのはタイからきた労働者二名。

［写真104．独特のデザインの庫裡］

［写真105．本堂内部，礼拝する親子］

［写真106．土地神と寄付像］

［写真107．一時出家者のための小屋］

12．スンガイパタニ（Sungai Patani）地域の寺院

地域の特徴：スンガイパタニはクダー南部の海に面し，中心となるスンガイパタニの街は南北の幹線道路，タイとマレーシアとシンガポールを結ぶ高速道路が通っている。古代クダーの港市であるムダ川河口とジュライ山が海側に目立つシンボルである。また，その直ぐ南がペナン州と接しているために，ペナン州の工場地域へのアクセスが容易なため，開発によって新興住宅地域があちこちに作られている。もともとクダー州の南部は，イスラーム化以降のクダーの政治中心からすると後発地域で，華人やインド系の移民集落も多い。海岸部はマレームスリムによる水田開発，内地は規模の大きなゴムプランテーションであったが，1990年代にアブラヤシへの転換が進み，海岸部を中心に「街化」が進む。

同時にムダ川河口に広大なマングローブ地域を抱え，古い集落ほど典型的にムダ川に接している。

［写真108．市街の車修理屋センター］

［写真109．新興住宅群］

1）Wat kg Raja

正 式 名 称：Wat Damrongrattanaram

位 置 情 報：北緯５度38分29秒　東経100度30分04秒

標　　高：12m

立地と景観：クダー南部の商業都市中心となりつつあるスンガイパタニ市街，バリンへ向かう交通量の多い幹線道路K67号線通称，Jalan Kuala Ketilが旧市街から東へ向かうところを50m北側にはいった住宅街にある。スンガイパタニ市街の華人が目立つ地域に近い。

歴史と伝承：あたりの村の起源は伝わっていないが，寺の創始住職の記録は1975年である。1963年の記録でもタイ人は少なく，中国系タイ人，華人が多く商人であるとする。その当時タイ人は30家，180人。

僧　　侶：７名いるが，全て華人である。タイ語は話せるがマレー語は不自由で，福建語はできないのかと逆に尋ねられる。若い僧侶の中には入れ墨をしているものが複数おり，出家前には日本に出稼ぎに行っていたという。1963年の記録では住職はパタルンからきたタイ人であった。

寺院内施設：華人が多い市街地である。そのためか華人的な建造物が多数ある。寺院としての門はなく「犬猫の排泄物放置を禁じる」「朝八時から夜一〇時まで開門」と通知板がある。

コンクリート作りの仏塔と，ごく近年建築のタイの現代様式でガラスタイル張りの経堂がある。四階建ての講堂（護法堂）2000年建立が実質的な本堂であり，内部に釈迦とその弟子の像三体，観音像，布袋像が並ぶ，歴代の住職像も三体（外に二体）ある。香と油が販売され，僧侶の座席が壁際に並ぶ。この講堂の立派さはこの寺院に併設されている納骨堂とかかわりがある。僧侶の居る庫裡，食堂と台所には高血圧に効く薬茶のサービスがあり，健康法に関する記述がある。

歴代住職像，鐘楼の他，一番奥まった場所に三階建ての納骨堂がある。この納骨堂に納められているのはほぼ華人の骨壺で，この寺の存在意義ともなっている。

寄付像も，クダー北部のタイ寺院とはやや趣のことなるものが多い。タイから購入した像と思われるのは寝釈迦像と，タイから購入されたらしい誕生曜日仏８体。しかし，四面仏は手作りのコンクリート造りで，その形態はむしろ，スンガイパタニのインド系プランテーション地域にあるヒンドゥー寺院の祠と似ている。また，ルシ像は三体。特徴的なのは，ダトクラマット像で門から直ぐの場所に等身大のコンクリート造りで作られている。ダトクラマットの名前はPanglima Hasimといい，マレー帽を被った白鬚の男性像でシャツと青色のサロンをまとい，右手にクリス，左手に金のインゴットをもっている姿である。2005年に作られている。ダトクラマットは土地神像ともいわれ，地元のマレー人と華人の混淆信仰の姿であるが，北部ではほとんど漢字

の札で代用されていた。また観音像の他，土管の上に巨大なパイナップルを据えた奇妙な立像があるが，これは福建語の「旺」を招福像としてパイナップルとして顕しているものの一種である。タイ寺院では唯一見かけたものであった。その他，足つぼ刺激健康法用の小石を埋めた通路があり夕方には近隣の高齢者が裸足でその上を歩いている姿が見られた。

タイ語の記載はほとんど見られず，もっぱらここを訪れるのが華人であることを示す。

寺の行事表があり，創始住職記念の読経，中華正月，仏陀誕生節（ウェーサカ），仏陀説教日，雨安居入り，カティナ祭。などの予定に加え，12月25日にダトクラマット，と四面仏の祭がある。

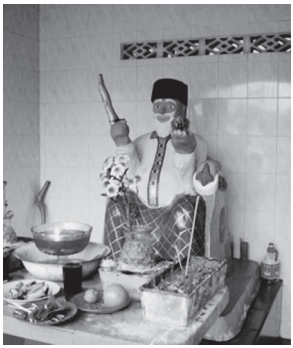
この寺はクダー 南部の都市華人の状況を象徴するものでもある。納骨堂の利用者がほぼ華人であることから華人色の強さが見て取れる。

［写真110．仏塔］

［写真111．講堂内］

［写真112．福建的招福パイナップル］

［写真113．本堂とセーマー］



［写真114．ダトクラマット像］

［写真115．四面仏］

［写真116．納骨堂］

［写真117．納骨堂内部］

［写真118．足つぼ刺激用の砂利小道をあるく華人］

（クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院：寺院調査から　（４）に続く）

追記　：本稿は科学研究費による調査「マレー境域世界におけるタイ仏教徒コミュニティの研究」（課題番号19510253）2007-2009 による成果の一部である。

参考文献

Abu Hassan bin Dahaman, 1976. “Petempatan orang-orang Siam di Kampung Begia Kedah Satu Tinjauan,Jabatan Sejarah Univerisiti Malaya ,KL］。

Thamrong sak Aayuwathana 1974.Thai nai Malaysia Roong phim kan Sasana Krungthep